

経済・金融 フラッシュ

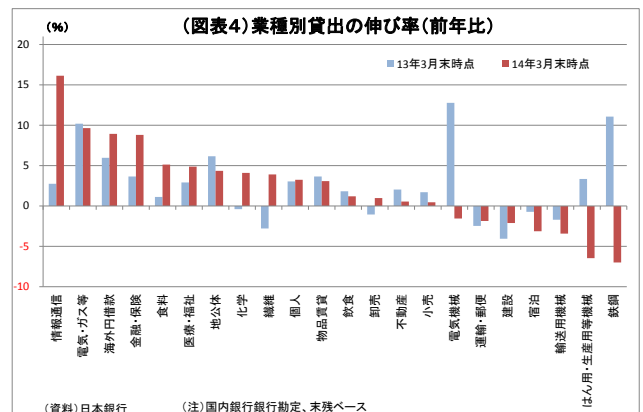
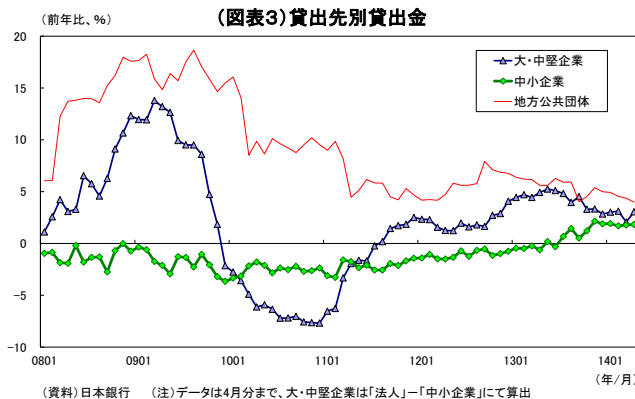
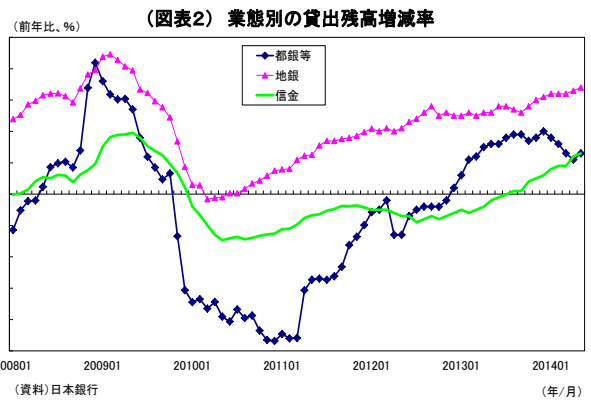
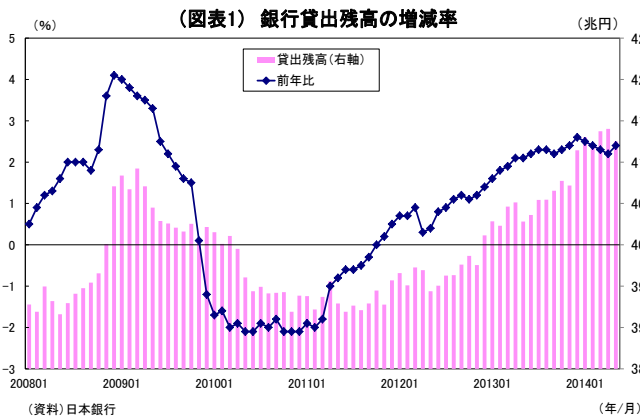
5月マネー統計 ～非製造業向け貸出が牽引役に

経済研究部 シニアエコノミスト 上野 剛志
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向：5ヵ月ぶりに伸び率が拡大

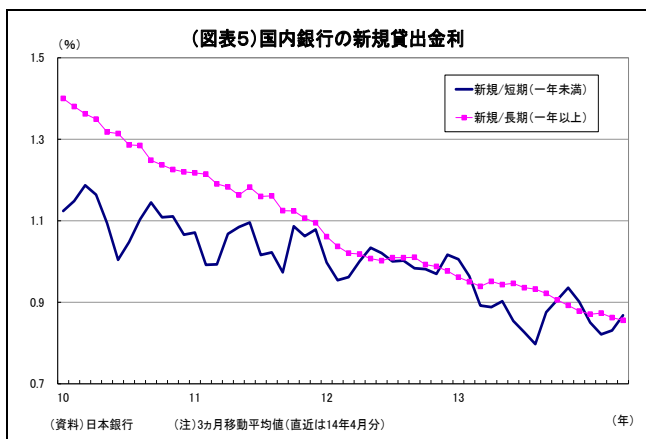
日銀が6月9日に発表した貸出・預金動向(速報)によると、5月の銀行貸出(平残)の伸び率は前年比2.4%(前月は2.2%)となった。伸び率は昨年12月の2.6%をピークとして縮小してきたが、5ヵ月ぶりに拡大した。業態別の伸び率では、都銀等が前年比1.3%(前月は1.1%)、地銀が同3.4%(前月は3.3%)とともに拡大している(図表1～3)。引き続き、M&AやREIT向け貸出等が牽引したようだ。銀行貸出の伸びは2%台前半で一進一退となっている。

なお、今年3月末時点の業種別貸出動向を見ると(図表4)、主要22業種のうち、前年比プラスが15業種であった。昨年3月末と比べてプラスの業種数は同じだが、非製造業の存在感が高まっている。今年3月末の伸び率上位には情報通信をはじめ、電力・ガス、金融・保険、医療・福祉など非製造業が名を連ねているほか、昨年3月末比で伸び率を高めているのも非製造業が多い。堅調な内需や消費増税に向けた設備投資需要を反映したものとみられるが、増税後もこれら牽引役の勢いが続くかどうか注目される。



上記のとおり、貸出量の増加は続いているが、金利の低迷も続いている。新規貸出のうち、長期(1年以上)は3月に0.834%を記録した後、4月に0.856%に留まっている(図表5)。

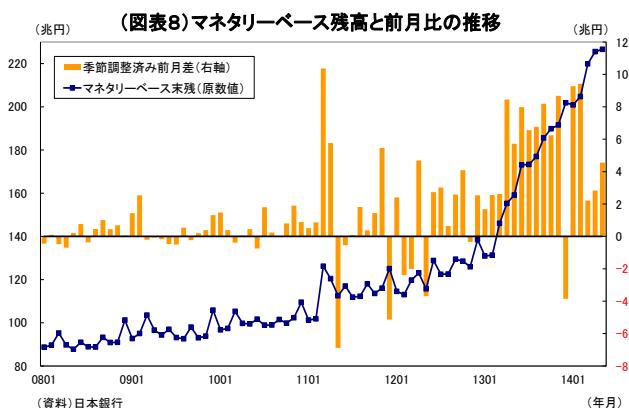
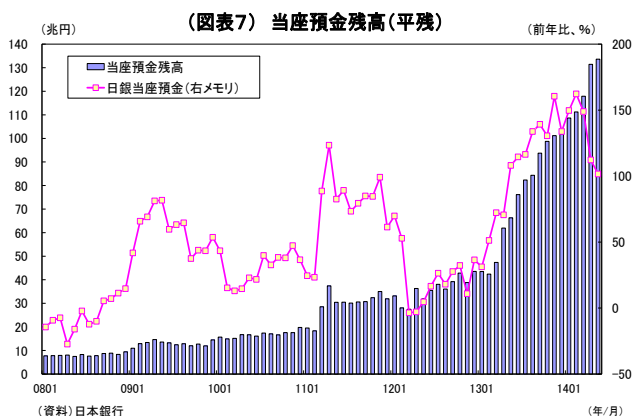
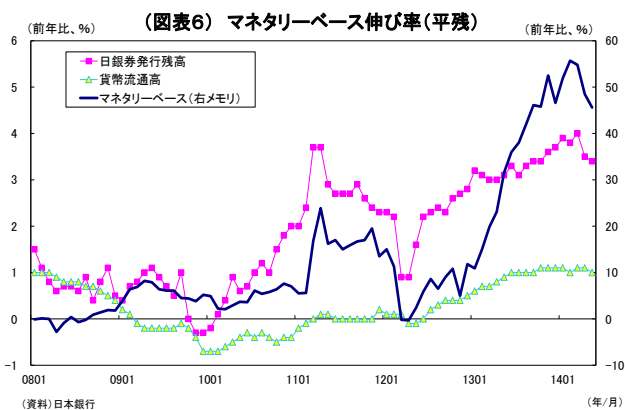
日銀の異次元緩和や低利資金供給などが金利抑制に働いているうえ、銀行間の厳しい貸出競争が影響していると考えられる。銀行の利ざやが圧迫されており、採算面では厳しい状況が続いている。



2. マネタリーベース: まだ問題なし

6月3日に発表された5月のマネタリーベースによると、日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示すマネタリーベース平残は224.4兆円と15ヵ月連続で過去最高を更新した。前年比伸び率は45.6%(前月は48.5%)と引き続き高い伸び率を維持しているが、前月から小幅に低下した。日銀当座預金の伸び率が101.6%(前月は112.2%)と縮小した影響が大きい。

月末残のマネタリーベース残高を見ると、5月末時点で226.6兆円となり、月間増加額は1.1兆円に留まった。日銀はマネタリーベースを「年間約60~70兆円」ペースで増加させ、14年末に270兆円とする見通しを掲げている。単純に月換算すると毎月約5.0~5.8兆円の増加ペースとなるが、5月の増加額は一見このペースを大きく下回った形となる。



季節調整済みのマネタリーベース(平残)の月間増加額も 4.6 兆円と、上記の見通し達成に必要な増加ペースに届かなかったが、前月(2.8兆円)からは増加ペースが改善。また、今年に入ってから5ヵ月平均で見ると月間 5.7 兆円とクリアしていることから、年末見通しに向けてまだ問題ないペースで進捗していると判断される(図表 6~8)。

3. マネーストック：減速感強まる

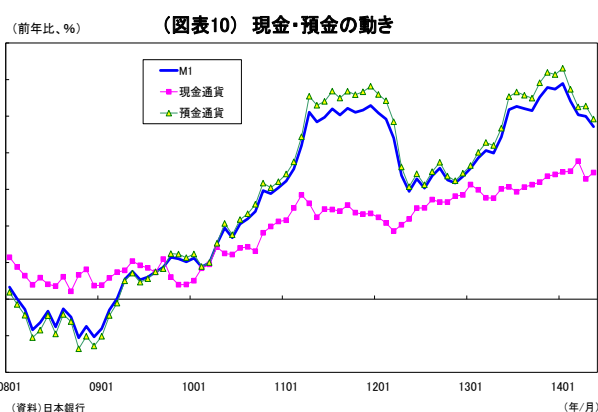
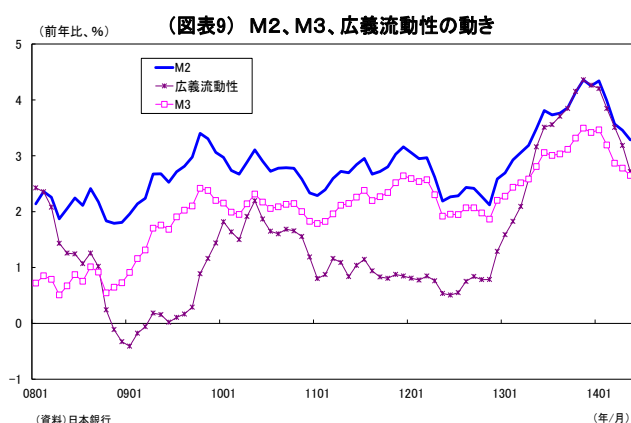
日銀が6月10日に発表した5月のマネーストック統計によると、市中通貨量の代表的指標であるM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高の伸び率は前年比3.3%(前月改定値は3.5%)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同2.6%(前月は2.8%)とそれぞれ4ヵ月連続で縮小した。伸び率はそれぞれ13ヵ月ぶりの低水準。

M3の内訳では、預金通貨(普通預金など)の伸び率が前年比4.9%と前月(5.3%)から縮小、一部は現金に流れたとみられ、現金通貨の伸び率が3.5%(前月は3.3%)とやや高まったものの、預金通貨が鈍化した影響を埋め切れなかった。

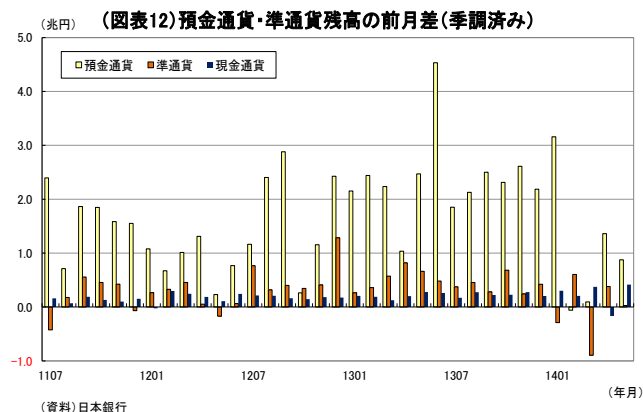
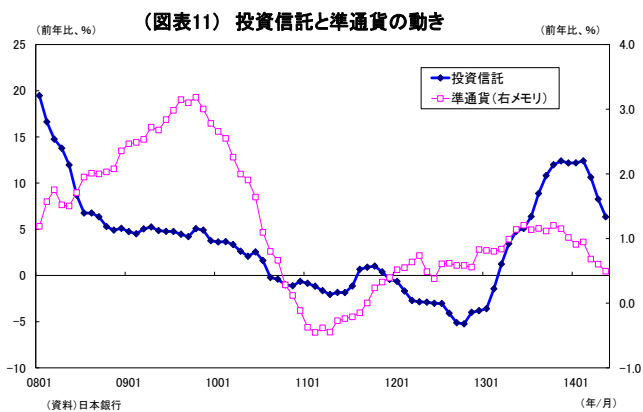
また、M3に投信や外債といったリスク性資産等を含めた広義流動性¹の伸び率も前年比2.7%(前月改定値は3.2%)と5ヵ月連続で縮小している。

内訳では、M3のほか、金銭の信託(前年比6.5%→4.6%)や投資信託(元本ベース、同8.3%→6.3%)、外債(▲1.0%→▲2.1%)などの伸びも鈍化したため、M2やM3に比べて伸び率の鈍化が大きめになっている(図表9~11)。

マネーストック構成要素のうち、残高の大きい預金通貨、準通貨、現金通貨について季節調整済み前月比で見ても(図表12)、今年2月以降、残高の増加(流入)規模が大きく鈍化している。マネーストック増加要因である経常収支黒字が縮小していることに加え、今年に入ってから銀行貸出の伸び悩みが、市中マネー増加ペースの減速に影響していると考えられる。



¹ 広義流動性は今回定例の改定を実施、過去にわたって遡及改定されている。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。